

特選  
2021  
文部科学  
大臣賞

## 第54回「おかねの作文」コンクール

# 新たな一面

神奈川県・聖ヨゼフ学園中学校 3年 酒井 優羽

私はお金が好きだ。この言葉を聞いて大半の人は、好きなものを買えるから、好きな場所へ行けるから、食べものをたくさん買えるからなどといったお金そのものというより、お金の価値に重きをおいた理由を思い浮かべると思う。もちろん私もそうだ。お金を使えば、自分の欲しいものを手に入れることが出来たり、使い方によっては人助けをしたりすることだって出来る。だが、私にはもう一つお金が好きな大きな理由がある。それは紙幣や硬貨のデザインだ。

私は、紙幣や硬貨は言うならば芸術作品だと思う。お金は毎日多くの人が手にするものなので、国はたくさん工夫をし、その国らしいデザインが施されている。家族旅行で海外を訪れた時はその国の紙幣や硬貨のデザインをチェックし、何を意味しているのか調べるようにしている。それを家族で話すことがとても楽しくて、世界の様々な紙幣を調べるようになった。調べてみると、アメリカのドル札のように長年にわたりデザインが変化しない紙幣があったり、まだ亡くなっていない王や大統領が肖像に描かれている紙幣があったりと、たくさんの新しい発見があった。絵柄だけでなく形や色、素材なども異なり、こんなにも魅力的なものがあるのかと私はお金の新たな一面を見つけた気がした。それから、訪れた国の紙幣をお土産に持って帰るようになった。そして、少し時間が経ってからその紙幣を見ると、旅行した時にタイムスリップしたような感覚になる。もしその紙幣が少しボロボロになっていても、それは多くの人の手に渡り、様々な環境を過ごしてきたのだと思うととても尊く、素敵なものだと感じる。

海外だけでなく、私は日本のお金のデザインも好きだ。その中でも私は、100円玉に魅力を感じる。日常の中で目にすることの多い100円玉には、桜花が描かれている。春の暖かい風にふかれながら花びらが散っている美しい情景が想像でき、まるで私がそこにいるような感覚に陥る。桜は日本の国花ともいえる花

であり、花言葉の一つが「精神美」とされていることから、日本人の品格を表すシンボルのような気がする。そんな思いがこもった桜が私を近くから見守ってくれていると思うととても心強く、良い気分になる。

一方、日本では、2024年に一大イベントが控えている。それは、20年ぶりの紙幣の刷新だ。紙幣の色が変わっていたり、文字の大きさが変わっていたりするそうだ。私が生まれてから初めての経験ということもあり、新たな紙幣が誕生すると思うと自然と心が躍る。新紙幣を通して、海外の人に、日本により興味を持ってもらえ、そして海外の人だけでなく、日本人が母国のことを知る良いきっかけになると思う。それは、紙幣の存在する一つの大きな意味だ。たかが紙1枚だとしてもそこにはたくさんの人の思いが込められ、誰かにその思い、メッセージが届く手紙のようなものなのだ。手紙が大切なものと同じように、紙幣は誰かからのメッセージだと思い、大切に守っていかなければならない。

しかし、現在キャッシュレス化が進んでおり、財布を持たない人や現金を使えない店が増えている。キャッシュレスは、すぐに会計が出来たり、現金を持ち歩かなくてよかったりと様々なメリットがあり、とても便利だ。だが、現金が使われなくなると紙幣や硬貨のデザインを楽しむことが出来なくなり、せっかくその国の特徴が詰まっている、一種のガイドブックがなくなってしまうことになる。そのガイドブックを守るためには、世界を便利に進化させつつも、昔の文化を忘れずにいる必要がある。昔ながらのものを生かしつつ、どう新しいものを生み出していくかが一番大切なことであり、一番難しいことだ。

お金は様々な面を持つ。ものを買う、国を表現する、思い出になる、勉強になる。だがそれを意識してお金と向き合っているだろうか。私は自信を持って首を縦に振ることは、今の時点では出来ない。だからこれからは、身近にあるからこそ心のどこかでは、常にお金の持つ様々な面を意識し、お金に対して尊さやありがたさをより感じながら生活したい。そうすることで、また新たなお金の一面、魅力に出合えるかもしれない。